

「それいゆ “soleil”」 ～岸田國士『紙風船』より～

時 初夏のある日曜の昼下がり

場所 ある賃貸マンションのリビング、そしてバルコニー

舞台上にはバルコニーとおほしき場所に一脚のデッキチェアとテーブル

リビングに置かれたCDラジカセから音楽が流れている。

男はデッキチェアに寝そべり、ビールを飲みながら本を読んでいる。

女が現われる。寝起きの様子。

男、本を読みながら、

男 おはよ。

女 おはよう……

男 大丈夫？

女 ん？

男 二日酔い。

女 ちよつとアタマ痛いけど平気。

男 すこかったよ、昨日。

女 ゴメン、久々にはしゃいじゃって……

男 玄関で寝てたの、憶えてる？

女 ウソ。

男 ホント。ベッドまで運ぶの大変だったんだから。

女 ……ワタシ、なにかへんなこと言った？

男 別に……どうして？

女 ううん、ならいい……ごめんなさい。みんなと会ったの久しぶりだった

男 から、つい。

女 どれくらい飲んだの？

男 ……三人でビール何杯か飲んで、ワインを五本……六本か。それ空けて。

女 あとは……憶えてない……

男 (笑いながら) 大酒飲みだな。

女 私を酒飲みにしたのは先生でしょ？

男 でもグラス一杯をボトル二本にしたのは僕じゃないよ。

女 それはまあ、そうだけどさ……

男はまた本を読んでいる。

女、外を見やり、

女 ……天気いいね。

男 ん？ うん。

女 いいな。晴れた日曜。

男 でももう二時だよ。寝過ごして損したね。

女 今日はいいの？

男 なに？

女 研究室行かなくて。

男 キミが起きないから出るに出れなかった。

女 ウソ、ごめんなさい。  
 男 いやいや冗談。それがさ……どうしようかと思って。  
 女 行かないの？

男、本を閉じ伸びをしながら、

男 どうしようかな……

女 川上先生（く）待ってるんじゃない？

男 いや、別にいつも約束してるわけじゃないし、教授もたまに来ないときあるし。

女 ワタシ、起きたらいないんだと思ってた。

男 行こうと思ったんだけど本読み始めたたらなんかね。天気いいし。

女 どうするの？

男 そうだな……

男、少し考える。

女 先生いなかったら、姉さん誘って買い物行こうと思ってたんだけど、

男 行ってきなよ。チエちゃんによろしく言っといて。

女 先生は？

男、再び本を開きながら、

男 ん、いいよオレは。気にしなくて。  
 女 ……………。

不満げな女の表情。

男、ふと彼女の沈黙が気にかかり、

男 どうかした？

女 ……別に。

男 その割になんか言いたそうだけど。

女 なんでもない。

男 なに。言つてよ。

女 別に。なんでもない……

男 ……………。

間。

男は再び本へ目をやる。

女 ……ハルナ達、今日秋川でバーベキューだつて。

男 へえ。

女 キャンプ場あるでしょ。カナエも一緒。ふたりとも旦那さん連れて行くつて、

男 カナエちゃんとこのコ、もうそんなになつたの？

女 え、

男 三月に生まれたばかりじゃない？もう連れて歩けるんだ。

女 …二月。

男 そっか。へえ、いいね。家族でバーベキュー。

女 カナエはお母さん近くに住んでるから赤ちゃん預けて。

男 ああ、そっか。やっぱり便利だね、親が近いと。

女 だからカナエも、旦那さんとふたりで。

男、無反応。

テーブルにおいてあったビールの缶を取ろうとする。

しかし女が男よりも先にビールを取り上げる。

男 …なに？

女 そっちこそなに？ 昼間っから飲んで。

男 別に…別に今日始まったことじゃないじゃない。それに久々にのんびり出来そうなどこなんだしさ。

男、女のビールを取り返そうとする。

だが女はそれをかわす。

男 なに？

女 「なに」じゃない。たまの休みなのに。

男 休みって…まだ決まったわけじゃないよ。もしかすると教授んどこ行くかもしないし、

女 じゃなんでお酒飲んどのの？

男 いや、だからどうしようかなくて、

女 どうするの？

男 え、

女 行くの？ 行かないの？

男 だからまだ決めてないって。

女 決めて。どっち。

男 ……なに怒ってるの？

女 別に、怒ってない。

男 怒ってるよ。

女 怒ってない。

二人静止。

男、本を閉じテーブルに置く。

小さな溜息をつき、

男 ……なに？僕が昼からだからしたらしてるのが気に入らないわけ？

女 ……。

男 いいじゃない。なんかさ、いい天気だからだかららしい気分です、

女 私も誘われたの、バーベキュー。

男 え。

女 でも日曜だから先生行けないと思って断った。

男 行けばよかったじゃない。

女 私ひとりで？

男 いや、ひとりじゃなくても、電話一本くれるとか、

女 先生はもう寝てる時間だった。

男 じゃあ朝起きてひとこと言ってくれれば、

女 言えば一緒に行ってくれた？

男 え、

女 どうせなんだかんだって断ってた。

男 それは……分かんないよ。

女 分かんなくない。いつも誰かと一緒に出かけようって話するとめんどく  
さそうな顔して断るじゃない。

男 いつもって……そんなに何回も誘われたことないよ。

女 あります。ただ先生が憶えてないだけ。いつももうわの空で「研究室行  
かなきゃ」とかなんとか言ってる。

男 ……………。

男、返す言葉をなくす。  
いつしか音楽は止んでいる。

男 ……じゃあ、どうしようか。

女 どうするかは先生しだいでしょう。

男 そっか……

男、ふと外を見やり、

男 ……………じゃあ、散歩しようか。井の頭でもいいし善福寺公園でも、  
(突然)ワタシ買い物したい。

女 え、

男 新宿。夏モノの服見たいから伊勢丹行こ。

女 新宿？ 吉祥寺じゃなくて？

男 ちゃんとしたデパートがいいの。新宿伊勢丹はデパートの王様でしょ。

男 いや、まあ、いいけど…………

男 じゃあ先にどうするか決めよ。まず、正面から入ったらアクセサリー売  
り場でしょ。最初はそこを見て、

女 服買っんじゃないの？

男 見るだけ。で、それから帽子売り場を見て…………あ、新しいサングラスも  
欲しい。

女 あ、僕も欲しいな。

男 でしょ？ そしたら一緒に似合うサングラス探して、私が先生の決めて、  
先生が私の決める。

女 ふたつも買っカネないよ。

男 探すだけ。そしたら次は靴売り場、オレンジのミュールが欲しいんだ。

女 見るだけだよ。

男 分かってる。シャネルとディオールのショップは前を覗くだけで、化粧  
品売り場、ヘレナとランコムも見るだけ。そしたらアナスイでネイルを  
一本だけ買う。

男 なに？ 買うの？

女 千円ちょっとだよ。一階はそれで満足。エスカレーター乗って二階。ロ  
 ンペとアニエスとイネド見て……あ、サブのトルサイズも見なきゃ。そ  
 したらぐるっと回ってギャルソンは素通り。ツモリをじっくり見てパー  
 バリーもいちおチェック……あ、ズッカも見ときたい！ そしたら三階。  
 でも三階はワイズだけでいいや。連絡通路渡ってメンズ館に行く。  
 女 いいよオレのは。  
 男 先生の夏モノ、まだ買ってないでしょ？ 三階は先生に似合わないから  
 女 ワンフロア降りて、  
 男 悪かったな。  
 女 先生は気取らない服のがいいの。アニエスとポール・スミスとやっぱり  
 男 ワイズも。タケオキクチがないんだよね、王様のくせに。  
 女 王様にも事情があるんだよ。  
 男 そしたら一気に六階まで上がる。トゥモローランド見てカルバンとコム  
 女 サは、まあちよつとだけ。そしてまた連絡通路通って本館に戻って文房  
 具！ 先生も見たいでしょ？  
 男 まあね。  
 女 それ見たら下に降りよ。五階の家具売り場。ベッドとソファと、テー  
 ブルとカーテン。食器も欲しい！ ハウスオブローゼにも寄りたいたし新  
 しい枕も欲しい！ そしたらメインの四階ね。フォクシーと「CB」とジュ  
 ンヤと、ツモリとアナスイの着も見たい、そしたらまたラングとミュ  
 ウミュウとジルサンダーとクロエと……うー、キリがない！  
 女 そんなだけ歩くとさすがに疲れたる。  
 男 そうね。じゃあ三階のクローバーでお茶しよ。アスパラガスとハムのマ  
 女 ヨネーズサンドイッチにミルクティー。先生はいつもどおりカフェオレ  
 ね。ひと休みしたら四階に戻って、  
 男 そんなに廻りきれないよ。今日日曜じゃない？ すごく混んでるって。  
 女 分かってる。  
 男 それにこれからじゃ全部見れないよ。せめて服だけに、  
 女 買わなくてもいいからひとまわりしたいの。  
 男 じゃあさ。君が買物してる間、オレ本屋寄ってるから。  
 女 え、  
 男 紀伊国屋で待ってるよ。ちょうど欲しい本あったんだ。それに本屋だつ  
 たらキミが何時間買物しても退屈しないし。そのあと落ち合つてメ  
 女 シ食に行こう。  
 男 ……どうして。  
 女 え。  
 男 なんて私のことほつとくの？  
 女 ほつとくわけじゃないよ。ただそつちのが効率いいじゃない？ 君は服  
 男 を探して、僕は本を、  
 女 分かってない。  
 男 え、  
 女 先生はなにも分かってない。  
 男 何？  
 女 私が欲しいのは服でもソファでもない。  
 男 じゃあ何？  
 女 分からない？

男 ……分かんないよ。「贅沢しなくてもいい、お金はちょっと多めにあればいい」って言ってたじゃない？ いまさらなんでそんなにモノ欲しがるか、分かんないよ。

女 ……。

沈黙。

女 私は……

男 ?

女 私はただ、先生と一緒に居たいの。

男 じゃあウチでもいいじゃない。

女 そうじゃない。ウチじゃなくて、別に秋川でもなくて、ただどこかに行きたいの。日曜なのに先生は学校に行つて、私はひとりで家にいたり買い物したり。たまにウチにいたとしてもそうやって本を読んでも、なんの話もない。仕方ないから私も本を読む……でもそうじゃない、そうじゃなくて、私はただ……

女、そこで言葉を止める。

自分を落ち着かせて、ぼつりと、

女 私、日曜がキライ……（ ）

男 ……。

重い沈黙が訪れる。

男 ……僕は、歳を取りすぎてるのかな。

女 どうしてそんなこと言うの？

男 どうしてってわけじゃないけど……ちょっとそんな気がして、聞きたくない。

女 え、

男 そんな話、先生の口から聞きたくない。

女 いや、別に深い意味はないんだ。ただ、意味とかじゃない。なんでそんなこと言うの？ 私は先生の歳なんてぜんぜん気にしてない。同じ歳だつて年上だつて、そんなこと、聞きたくない……。

男 ……。

更に深い沈黙。

考え込む男、俯いたままの女。

遠い時間が流れていく。

男 あのさ……

女 ……なに？

男 話、しようよ。（ ）

女 いい……もう話すことなんてない……

男 ……いや、僕がしたいんだ。そうだな……オレが……いや、違うな……

男、更に少し考えて、

男 ……ええ……むかし昔、あるところに、（）

女、思わず吹き出す。

男 笑うなよ。

女 ……だって、まじめな顔して……

男 まじめな話だよ。むかし、あるところに……

男、一息吐いて、

男 ……あるところに、男が居たんだ。男は本を読むのが好きで、大学の文学部に入って、いっぱい勉強して。でもまだ勉強したりなくて大学院まで進んだ。でもホントのこと言うと、勉強するために院に行っただんじやなくて、ただ本を読みたかっただけなんだ。院っていつてもやることは教授の世話ばかりで、カネもほとんどもらえなくてホント貧乏な暮らしでさ。ただ本を読むことだけが楽しかった。三年、四年経っても男はまだ院にいた。結局書きたくもない論文書いて、修士号とって、博士号とって、教授の口利きで講師の仕事をするようになった。でもそいつの講義はひとりよがりだ。話したいこと話すだけで全然授業になんなかった。退屈で、ほとんどの生徒は寝てるか、出席とった後

に教室出て行くか。でもひとりだけ、そいつの授業まじめに聴いてるコがいたんだ。女のコ。背が高く、すごく美人って訳じゃないけど、印象的なコだった。

男はさ……それまで自分でも講義なんてつまらないって思ってたんだけど、そのコに気付いてから授業が楽しみになった。週に一コマ、たった九十分の間だけだったけど、でもそれを楽しみにして毎週毎週講義の準備をするようになった。

それでそいつはさ……夏休みの前、学期末のテストが終わった後。そいつは、その生徒を呼び止めて……講師のくせにそのコを……そのさ……デート、に誘ったんだ。

黙って聞いていた女が小さく笑い始める。

男 返事はあつさりオーケーだった。男は喜んでさ。友達に無理言ってるクルマを借りた。服も、それまでほとんど毎日おなじで全然気にしなかったけど、そんなときはちよつとカッコつけて、ていうかも「気張りすぎだろ」くらいのカッコして、そしてふたりでドライブしたんだ。

だけど男は車に乗るの久しぶりで、道に迷うはトラックとぶつかりそうになるは、「絶対にキス付けんよ」って友達に言われたのに電柱にこすってボディへこませて、そりゃものすごく大変だった。

女、さらにくすくすと笑う。

男

結局、目的地の海に着いたのは日が暮れた後だった。男は自分の段取りが悪くて、情けなくて、何も言えなかった。ただ夜の海をずつつと見た。ふたりとも一言も、何も喋りなかった。

だから帰りに「せめて飯だけでもいいところ」って思ったんだけどどこもいっぱい、結局ぶつうのファミレスにした…… ホント、情けなくてしょうがなかったよ。三十過ぎた男が、生まれて初めて女の子を誘って、そのデートがこれ以上はないってくらい散々で、カッコ悪くてさ。

女

……。

でも彼女はそこで「楽しかった」って言うてくれたんだ。お世辞でも、社交辞令でもなく。ホントに楽しそうな顔して。オレはその顔を見て、情けなさもカッコ悪い気持ちもぜんぶふっとんだよ。本当に嬉しかった。いまでもそのときの彼女の顔は憶えている……

男

そして……このコとまた一緒にどこかへ行こうと思った。映画でも水族館でも、遊園地でもどこでも。いや、どこにも行かなくてもいい。こうやって一緒に飯食って、どこでもいいから散歩とかして。そうしたら次こそはもっとまじなデートになるだろうって。もしかするとオレは講義みたく話しっぱなしでキミは聞いているだけかもしれないし、キミがいっぱい話して、僕が聞いているだけかもしれない。もしかすると二人とも何も話さないかもしれない。けどまた一緒に、こうやって二人で過ごせたらいいなって、オレはそう思ったんだ……

男、そこまで言ったところで女がうつむいているのに気付く。

泣いているのかもしれない。

だが、その姿は男からも客席からも見えない。

男 どうしたの？

女 ……………。

男 ……なんか気に障ること言った？

女 ううん、そうじゃない……

ゆっくりと静かに、彼女に寄り添おうとする男。

肩を抱こうとする。

だがその瞬間、女が快活に、

女 先生、まだビール飲む？

男 え？……………あぁ……………

女 私も飲もうつと。

男 え、だって……………二日酔いは……………？

女 ううん、もう平気。

女、奥へ。

一人取り残された男、どことなくバツが悪そう。

しばらくして女がビールを二本持って出てくる。

そして止まっていたラジカセに別なCDをセットし、ビールを男に渡す。

女 はい。

男 ……サンキョ。

音楽が鳴り始める。

ふたり、缶ビールを開ける。

炭酸の抜ける音。

ひとくち飲み終えた後、女のため息。

しばしの間。

男 あのだ……

女 なに？

男 次の日曜、鎌倉（ ）行こっか。

女 うん。

男 海行こっ、由比ヶ浜。車借りてさ。天気よかったら、カブリオレ借りて、

女 電車がいい。江ノ電に乗る。

男 そう？

女 先生の運転、まだ怖いもん。

男 そっか……じゃ、これ飲んだら伊勢丹行こっか。

女 ……ううん、やっぱりいい。

男 え。

女 今日は、どこにも行かなくてもいい……そのかわりさ、ふたりでのんびり

りしよ……ウチで。

男 ……うん。

心地よい日差しの中、ビールを飲む二人。

部屋には明るい音楽が流れている。

女、ビールをテーブルに置く。そしてめいっぱい伸びをする。

縛られていた何かから解放されたように。

女の姿を見つめる男。

そして女、初夏の日差しの、少し傾いた太陽に向かい、

女 うん………いい天気だ！

男 はは。

ビールを口に運びながら、男が短く笑つ。

暗転。

幕。

《 上演記録 》

平成16年5月4日(火) / 5日(水) 王子小劇場

演劇・パフォーマンス総合イベント「PREFIX」にて上演

上演時間20分

脚本・演出 渡邊 一功

男 中田 顕史郎

女 こいけいこ

《 本作品上演にあたっての連絡先 》

166-0001

東京都杉並区阿佐谷北2-9-6 カーサプリマヘーラ102

03-3310-9595 / 090-6168-9595

watanabe@lyka.net

渡邊 一功 (リュカ)

注記

この作品は2004年5月王子小劇場(東京都)にて、劇場主催で行われた7団体合同の演劇祭「PREFIX」で上演されたものである。うち3団体は岸田國士の短編『紙風船』を原作そのままに上演、あるいは改訂上演し、作者の団体は『紙風船』をモチーフとした「オリジナル」としてこの作品を発表した。

当初は公演の企画的要因から『それいゆ〜岸田國士『紙風船』より〜』というタイトルで上演したが、構成・人間関係・作品の主眼は『紙風船』と大きく異なるため「原作」の域を出ていると判断し、タイトルから『紙風船』を外して副題に添えることで先達に敬意を表した。また『紙風船』に出てくる台詞や固有名詞を意図的に劇中に用いたのも(作中 印の箇所)、同作品そして岸田國士氏への敬意からのものである。